

「時制形式の交替現象」とは何か

—名詞文を対象として—

田村澄香

1 はじめに

本題の「時制形式の交替現象」とは、次のような現象を指す。次はそれぞれ時制形式を交替させることができる¹。(以下、文末時制形式のカタカナの部分は筆者が付け加えた。)

(1) 漱石という人は奥の深い人 {です/デシタ}。

(司馬遼太郎「司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録Ⅳ」)

(2) 松蔭は、およそ弟子を叱ったことのないような人 {でした/デス}。(略)

自分の運命について、いささかの絶望感も持たない、天性の楽天主義者 {でした/デス}。(司馬遼太郎「司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録Ⅳ」)

以上のように、名詞文では文末時制形式がダとダッタのどちらの形式でも述べられる文がある。しかし、この現象はどんな場合にでも起きるかという、そうではない。例えば次は、ダをダッタに交替させることができない。(※は文法的に意味が変わるため、不適格であることを表す。)

(3) この球場は私の所有物 {です/※デシタ}。あなたのいるロップスも私の物 {です/※デシタ}。 (「ビッグコミック」1998/5/30)

この例では、ダで述べると現在の事態を表し、ダッタで述べると過去の事態を表すことになるので、交替できないことが直感されるだろう。

本稿執筆の動機は、筆者が日本語を外国人学習者に教えていて、「昨日は月曜日です」と言ったところ (その日は火曜日だった)、「昨日は月曜日でした、ではないのですか」と質問を受け、返答に窮したことである。「昨日は月曜日です」と「昨日は月曜日でした」はどう違うのだろうか。これは冒頭の交替現象と同じ問題であり、この質問に十全に答えるためには「昨日は月曜日です」の時間構造の解明が必要である²。

さらに、次はダッタで述べると「想起³」といわれる文になる。(本稿では便宜的

に※の印で「想起」を表す。)

(4) 俺はまだ三菱商事の社員 {だよ/※ダッタヨ}。

(高田文夫「高田文夫対談集 笑うふたり 語る名人聞く達人」)

「想起」のタは、特別な意味合いが生まれることから、寺村 (1971) が「ムードのタ」と呼び、「デンスのタ」と区別したことで広く知られている。

以上のように、「ダ/ダッタ」は、例文 (1) や (2) のように交替できる場合、(3) のように交替すると不適格文になる場合、(4) のようにダッタに交替すると「想起」になる場合がある。「ダ/ダッタ」という時制形式は、本来、発話時を中心として、「XハY」の時間軸上の位置を指し示す。そのことによって時制は直示的だといわれる⁴。しかるに、ダとダッタのどちらでも述べられたり、あるいは時制形式が変わることで特別な意味合いが生まれるとはどういうことなのだろうか。

問題の解決のために、筆者は「XハY」—あるいは「XガYデアルコト」と考えても同じである—の内容が表す時間を問う。トキ副詞や時制形式を除いた「XハY」の部分、本来、時間概念から自由なはずであるが、いろいろな条件を伴うと時間概念が内在する場合がありますと考えられ、「XハY」の内容が表す時間と時制との間には相互に関わりがあるのではないかと考えられる。「XハY」の内容が表す時間的な意味を「「XハY」の時間的内容」という語を用いて説明する。「XハY」の時間的内容ということと、時間軸への位置付けということとは異なる。

「明日/今日/昨日」や「昭和二十二年/1945年」などの語がキーワードになるが、これらは従来、副詞か名詞かという問題として議論されてきた。次の①は名詞用法、②は副詞用法である。

① {明日/今日/昨日/昭和二十二年/1945年} ハ Y {ダ/ダッタ}。

② {明日/今日/昨日/昭和二十二年に/1945年に}、X ハ Y {ダ/ダッタ}。

本稿で主に検討対象となるのは①のタイプである。①のタイプにおける「明日/今日/昨日」および「昭和二十二年/1945年」などのトキ名詞や、(1) の「漱石」、(2) の「松蔭」などの名詞が有する時間的な性質について、従来あまり指摘されることがなかったが、名詞から「時間性」といった性格を取り出すことで、時制形式の交替という言語現象を説明することができるようになる。後述するが、これらの名詞は、「XハY」の時間的内容を保証する語として機能する。名詞の一部は、時間表現に関して、一定の文法的振る舞いをする。名詞には「名詞の時間性」とよぶべき性質がある。

名詞文の種類に関して、名詞文は「XハYダ」という形式をとった文が最も多いが、時間表現に関する限り、「～ハ」の文と「～ガ」の文に違いがなく、X項とY項の名詞を入れ替えてもおなじ現象が起きる。さらに、名詞文は文脈次第でさまざまな解釈ができ⁵、また、Y項の名詞を修飾する表現によって微妙に時間表現としての性格を変える⁶。さらに、名詞文では場面の情報に依存していろいろな意味を表すため、個別に見ていかざるを得ない。時間表現ではその「XハY」がどのくらいの長さで変わることなく成立するかが問題になる。

時制形式の交替は名詞文だけにみられる現象ではないが、他の述語文については言及しない。文の時間というとき、動きのない名詞文ではアスペクトは除外できる。例文は話し言葉だけに限定し、収集した資料の中からなるだけ実例を示す。

2 先行研究

2-1 「時制形式の交替現象」に関して

「時制形式の交替現象」に関する先行研究としては、工藤（1998）が最も詳しい⁷。工藤（1998）は「非動詞述語の過去形と非過去形の使い分け」に関して、「話し手の焦点のあて方の違い」であると述べている。すなわち非過去形は「話し手側の判断時を前面化」し、過去形は「事象側の成立時を前面化」という。さらに工藤は、過去形の文ではX項が「主体の非現存」を表すか、あるいは、Y項が「特性の過ぎ去り」を表すという。例えば、「彼はすぐれた文学者だった。しかし今はただの物書きだ」のようになれば「特性の過ぎ去り」であるという。

この主張は有力ではあるものの、本稿では工藤（1998）とは違った方向から名詞文を観察してみたい。すなわち、名詞文の構造を、X項とY項を分離しないで「XハY」として捉え、時制形式は「XハY」の全体に作用するという捉え方である。この捉え方では、上記のようなふたつの解釈は生まれない。「彼はすぐれた文学者だった」という文が表すのは、「彼はすぐれた文学者」が過去に成立するということだけである。この名詞文の構造に関わる立場は、「3 時制の作用域」のところで再び説明を加える。このように名詞文を捉えたほうが説明力が高く、かついろいろな名詞文を包括的に説明できると考えられる⁸。

2-2 脱時制に関して

文の時間を考察したものは、その多くが動詞文を対象としたものであり、動詞文には脱時制の文が量的にそれ程みられないため、先行研究も多いとはいえない。そ

の中で、高橋（1985）と田村（2005）を紹介する。

高橋（1985：172）は時間軸に位置付けのない（高橋の用語では「テンスからの解放」）動詞文を、「なりたつ時間が限定されていないもの⁹」と「過去のことの、時間の側面をきりすてた質化」とを区別している。時制形式の交替現象は後者の「過去のことの、時間の側面をきりすてた質化」に該当すると考えられるので、高橋（1985）のこの部分に関する記述を以下に引用する。

事実そのものは過去の特定の時間のことであるのだが、そのできごとの時間的な側面はきりすてて、そこからぬきだした質的な側面だけを問題にしたばあいには非過去形をつかうことができる。これらは、時間の側面をきりすてないで過去形でのべることのできるものもおおい。

高橋（1985）は、さらに、この指摘に該当する名詞文として、寺村（1971）の「昭和二十二年ハ戦後最大ノ飢饉ノ年ダ」を挙げている。

次に、田村（2005）は脱時制をその時間的性格から2種類に分類した。田村（2005）から引用する。

（ア）日本一高い山は富士山だ。

（イ）くじらは哺乳動物だ。

（ウ）昨日は月曜日です。 田村（2000）より

（ア）（イ）と（ウ）は、両者共に時間軸への位置付けがなく、時間に関係なく成立するので〈脱時制〉であるが、そのあり方は同じではない。（ア）（イ）は、広義の現在が限りなく広がって、遂に時間を超越した文である。このタイプの〈脱時制〉は広義の現在と連続する。従って、これらは〈脱時制：超越時〉と呼ぶのがふさわしい。一方、（ウ）はそういった広義の現在への連続がみられず、別の問題、すなわち時制形式の交替という現象が起きる。従って、（ウ）を〈脱時制：時間性不問〉と呼んで、二つを区別したい。

本稿は、高橋（1985）、田村（2005）を援用しながら論を推し進め、〈脱時制：時間性不問〉の語を用いて、以下のように考えたい。

（5）日本一高い山は富士山だ。 〈脱時制：超越時〉

（6）くじらは哺乳動物だ。 〈脱時制：超越時〉

(7) 昨日は月曜日です。 〈脱時制：時間性不問〉

3 時制の作用域

時制に関する従来の研究を見ると、述語の形態的なカテゴリーとして、主に述語だけに着眼して考察されているように感じられる。しかし、時制の作用域は述語だけではなくX項にまで及ぶ。次の例を見られたい。(ただし、次は本稿執筆時が21世紀であることが前提である。)

(8) 21世紀は混沌とした世紀 {aだ/b*だった}。

(9) 20世紀は混沌とした世紀 {aだ/bだった}。

(10) ぼくが見ているのは巨人阪神戦 {aだ/b*だった}。

(11) ぼくが見ていたのは巨人阪神戦 {aだ/bだった}。

交替現象が起きるのは(9)(11)の場合だけである。(8)b、(10)bは通常の文としては不適格であろう。(しかし、「想起」としてなら適格文である。また(10)bは書き言葉には見られる。この点は田村(2004)で詳しく述べた¹⁰⁾。(8)から(11)までの時制形式との適格性を決定しているのはX項である。

時制の作用域がX項にまで及ぶことは、特に目新しい指摘ではない。仁田(1997: 32)に次の指摘がある。名詞文では言語事実として、この指摘の正しさが証明される。

たとえば、テンスは、形態的には用言に局在化させられて存在しているものの、その働きの対象(作用域)が、用言に限定されているわけではない。

たとえば、「彼は学校へ行かなかったね。」では、／(77) [[[彼は学校へ行かなかっ]た]ね]／のように、過去を表す「タ」は、[彼ハ学校へ行カナカッ]を対象にし、それに対してテンスの意味を加えている。

さらに、何度か指摘したことだが、例えば「病気だ」という名詞述語は、「彼は病気だ」、「盲腸は病気だ」、「体のぐあいが悪いことが病気だ」というように、X項の語によって意味的類型を変える。

以上の事実は、時制の作用域はX項まで及ぶこと、名詞文ではX項と共に捉えなければ文の表す時間が把握できないこと、述語だけでは文の時間が完成しないことを示唆している¹¹⁾。このような事情から、先述したとおり、名詞文の構造を「XハY」に時制形式が承接したと考えたい。検討対象も発話されているか否かは別に

して、X項が特定できる文に限らなければならない。

4 「昨日は月曜日だ」の時間構造

ここでは、「XハY」に時間概念が内在する場合があることを述べ、「XハY」の時間的内容が過去であっても、変化することなくずっと成立する「XハY」であれば、ダの承接が可能であることを説明する。そして、「XハY」の時間的内容と時制との間には相関関係があることを主張する。

「昨日は月曜日だ」の時間構造を説明する前に、基本的なところからみておく。通常の名詞文では、時制形式がなければいつの「XハY」か理解されない。例えば、次の文の「あちらの丘の上が高級住宅地」は、ダッタがなければいつの「XハY」なのかわからない。これを(12) bのように、ダで述べれば現在の事態となるだろう。

(12) a あちらの丘の上がね、高級住宅地でしたの。

（五木寛之 塩野七生「おとな二人の午後 異邦人対談」）

b あちらの丘の上がね、高級住宅地デスノ。

(12) a、(12) bの例をみればわかるように、通常、「XハY」には何ら時間的な意味が内在せず、時制が「XハY」の時間軸上の位置を知らせる。よって、時間概念が内在しない「XハY」では時制形式の交替は起きない。時制形式が交替すると時間的な意味が変わるからである。

次に、「XハY」に時間概念が内在する名詞文をみていく。「XハY」に時間概念が内在する場合、「XハY」の時間的内容と時制との共起関係が問題になろう。基本的な文では次のようになっている。（以下の例文は、本論文執筆時が21世紀であることが前提である。）

(13) *21世紀は混沌とした世紀だった。 (= (8) b)

(14) 20世紀は混沌とした世紀だった。 (= (9) b)

(13) のように、「21世紀は混沌とした世紀」といえば、21世紀に身を置く私たちからみて現在の内容を有しており、(13) が不適格になるのも、現在の内容の「XハY」と過去をマークするダッタが衝突するからである。一方、(14) のように、「20世紀は混沌とした世紀」は、21世紀に生きる私たちからみて、過去の内容であるから、ダッタが承接できる。つまり、「XハY」に時間概念が内在する場合、ダッタを承接するためには、「XハY」が過去の内容でなければならないわけである。

以上の分析から、次の規則が導き出せる。

通常、「XハY」に時間概念は内在しない。時間概念が内在しない「XハY」では時制形式の交替は起きない。「XハY」に時間概念が内在する場合、基本的な「XハYダッタ」では、「XハY」の時間的内容も過去、時制もダッタである。

ところが、ダッタの承接について違いをみせた (13) (14) も、ダについては両方承接できる。

(15) 21世紀は混沌とした世紀だ。 (= (8) a)

(16) 20世紀は混沌とした世紀だ。 (= (9) a)

現在の内容の (15) がダを承接できるのは当然としても、(16) はどういうことだろうか。(16) は「*今のところ、20世紀は混沌とした世紀だ」といえないので、このダが現在を表していないことは明らかである。(16) のダは、「XハY」が時間軸に位置付けがないことを表す〈脱時制〉のダである。

次の文も (16) と同じ時間構造を有している。

(17) 昨日は月曜日だ。

(18) 昭和二十二年ハ戦後最大ノ飢饉ノ年ダ。 寺村 (1971) より

(16) から (18) の「XハY」の時間的内容は過去であるため、以下のように、ダッタを承接するのが基本的用法である。(16) を例に挙げる。

(19) 昨日は月曜日だった。

しかし、この「XハY」は変化することなくずっと成立するという特徴も兼ね備えているので、「XハY」の時間性を不問にして、ダも承接できる。

「昨日は月曜日だ」の時間構造は、以下のようにになっている。

「昨日ガ月曜日デアルコト」の時間的内容が過去である。かつ、「昨日ガ月曜日デアルコト」は時間に関係なく成立する。

以上の考察から、時制形式の交替現象を引き起こす要件を一般化すると、以下の二点であると考えられる。

- A「XハY」の時間的内容が、発話時を基準として、過去の内容であること
 B「XハY」が時間に関係なく成立すること

上記の要件Bを満たせば、ダを承接することができるが、一つの文で同時に要件Aを満たせば、このダは現在を表せないということが起こる。「昨日は月曜日だ」のダが現在を表さないこと、さらに、広義の現在へ連続するといったことが起きないのは、「XハY」が過去の内容に保証されているためである。「XハY」の時間的内容が過去であることによって、ダが現在（および未来）に位置付ける時制形式としての機能を自動的に失うといっているのではないだろうか。このことは、「XハY」の時間的内容が時制の文法的意味を決定しているということである。

最後に、「XハY」の時間的内容と時制との間の相互の関わりについて説明する。先に、基本的な名詞文では、「XハY」の時間的内容が過去なら、時制もダッタである、と指摘した。つまり、「XハY」の時間的内容と、時制は呼応・一致する。しかし、「昨日は月曜日だ」では、「XハY」の時間的内容は過去であるが、時制はダであるため、「XハY」の時間的内容と、時制は呼応・一致していない¹²。

「XハY」の時間的内容と時制との間には、以下のような相関関係がある。

「XハY」の時間的内容	ダの承接	ダッタの承接
過去（例：昨日は月曜日）	「時制形式の交替現象」	通常の用法

日本語では、「昨日は日曜日だ」は不適格文ではない。そこに日本語の時制の規則を見出さなくてはならない。「XハY」の時間的内容が過去であっても、ダを承接して不適格文にならないということは、日本語の名詞文では、時制形式は「XハY」の時間に従属しないことが許容されるという規則があるからである。言い換えると、「XハY」の時間的内容が過去であっても、文末時制形式にダッタは義務的に要求されない。

以上をまとめる。

基本的な「XハYダッタ」では、「XハY」の時間的内容と時制とは呼応・一致する。「時制形式の交替現象（のダの文）」は、「XハY」の時間的内容と時制とは呼応・一致しない。「XハY」の時間的内容が過去であっても、文末時制形式にダッタは義務的に要求されない。

5 「時制形式の交替現象」の条件

ここでは、「時制形式の交替現象」を引き起こす条件を明らかにする。先述したとおり、通常、「XハY」には時間概念は内在しない。時間概念が内在しない「XハY」では時制形式の交替は起きない。しかし、時間概念が内在しないはずの「XハY」が、常識としてよく知られている内容であったり、あるいは言語的に保証されればどうだろうか。

時制形式の交替現象の要件は、「A「XハY」の時間的内容が、発話時を基準として過去の内容であること」と、「B「XハY」が時間に関係なく成立すること」の2点であった。要件Aを保証する言語的条件とは何かを明らかにしつつ、どういった文が該当するかをみていく。

次は、従来から時制形式が交替できるとして指摘されてきた名詞文である。

(20) 外桜田門の前で、十八名の攘夷派浪士が大老井伊直弼を襲ったのは安政七年三月三日 {である／デアッタ}。 寺村 (1984 : 90) より

(21) 宮本武蔵は絵の方も達人 {だ／だった}。 三上 (1953 : 226) より

(22) 昭和二十二年ハ戦後最大ノ飢饉ノ年 {ダ／だった}。

寺村 (1971 : 174) より

(23) 1945年は敗戦の年 {であった／である}。 高橋 (1985 : 134) より

(24) 川端康成はすぐれた文学者 {だ／だった}。 工藤 (1998) より

(25) 昨日は月曜日 {です／でした}。 田村 (2000) より

上記の(20)は分裂文と呼ばれる。寺村 (1984 : 91) は、X項の時制が波線で示したように過去形の場合、「焦点の部分「～ダ」は、現在（基本）形でも過去形でもよい」と述べている。また(21)から(25)までのX項の名詞（波線部）は、それぞれ論者である「三上、寺村、高橋、工藤、田村」が指摘した時点より過去に時間位置をもっていて、これらの名詞が交替現象のキーワードになっていることは容易に察しがつく。興味深いことに、「XハY」の時間的内容は、発話時基準の絶対的時間が出現する。ちなみに上記例文では、たまたまこれらトキ名詞が全てX項に入っているが、(24)以外はひっくり返しがきき、Y項に入っても同じ現象が起

きる。

以下、5-1で、分裂文のX項の時制による交替を、5-2で、過去性のある名詞による交替を、具体例を挙げながらみていく。

5-1 分裂文のX項の時制による交替

分裂文は交替現象が起きる代表的な名詞文である。以下の例文も波線部で示したように、X項が過去形なので、文脈も関係なく必ず交替できる。(26)を例にとると、「XハY」の部分、すなわち「上田吾一さんが越されたのは一週間前」は過去の出来事である。なぜなら、分裂文は「動詞文に由来する(三上(1953:135))」ため、X項には元の文の時制が義務的に出現するからである。X項の時制によって「XハY」の時間的内容が過去に保証される。

(26) 上田吾一さんが越されたのは一週間前 {です/デシタ}。

(松本清張「紅い白描」)

(27) そしてもっと大きな読み損ねをしたのが、日本 {でした/デス}。

(瀬戸内寂聴 櫻井よしこ「ニッポンが好きだから 女二人のうつぶん・はつぶん」)

(28) ゴールの二子山部屋周辺で待ち構える僕らの前に一行が現れたのは、辺りも暗くなった夜7時半 {φ/ダ/ダッタ}。(週刊新潮 2001/2/1)

(28) では、文末時制形式がゼロ(φ)であっても、ダあるいはダッタであっても、それほど文の表す時間的意味が違わないように直感されるが、それは〈脱時制：時間性不問〉と過去が対立するものではないからである。一方、冒頭の(3)のように交替できない文では、時間的意味に違いを直感すると述べたが、それは現在と過去が対立するものだからである。

次のように、X項が現在であることが明示的に述べられると、文末はダッタに交替しない。次は、波線で示したように、トキ副詞「いま」とテイル形によって積極的に現在の「XハY」が表されている。このような現在の内容の「XハY」にはダッタが承接しない。

(29) 田中一渋谷にそんなジイサンがたむろってたら驚くよ！ いま話題になっているのは、渋谷にたむろってる10代の若者の言葉 {だよ/*ダッタヨ}。(爆笑問題「爆笑問題のピープル」)

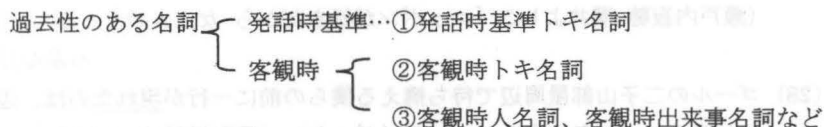
これを元の動詞文に戻せば「いま渋谷にたむろってる10代の若者の言葉が話題になっている。」となって、これは現在の出来事である。現在の「XハY」にはダ

が選択されなければならない。「*イマ～テイルノハＹダッタ」という形は書き言葉ではみられるが、話し言葉では許容されない¹³。

5-2 過去性のある名詞による交替

次に、過去性のある名詞による時制形式の交替現象をみていく。「昨日」などの語は、トキ副詞として用いられると、語彙的に「XハＹ」の時間位置を指標するが、トキ名詞として用いられた場合も「XハＹ」の時間的内容を過去に保証する語として機能する。

以下、過去性のある名詞は以下のように分類できる¹⁴。ただし、以下の議論は、本論文執筆時が 2005 年であることを前提とする。「客観時」の「客観」という語は宮島 (1997) から借用した¹⁵。



まず、「①発話時基準トキ名詞」のタイプからみていく。「①発話時基準トキ名詞」—「昨日、去年、当時、あの時」など—は、発話時がいつであっても、過去性を有する。以下の例文の「XハＹ」の時間的内容は波線部の「ムカシ」「昨日」によって保証される。中には (33) のように、「当時の (日本)」という形をとるものもある。過去の「XハＹ」であればダッタが選択されるのが一般的なので、このようにダが選択される事例はそれほど多くない¹⁶。

(30) 昨日は月曜日です。(= (7))

(31) どうだ、そうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はただ五把 {だ/ダッタ}。よくまあ、五把の藁などで、あんな力がでるもんだ。

(宮沢賢治「オツベルとぞう」)

(32) ソレワ アノ ムカシワ ム ムキ° メシ {ダワナー/だったわなー}。
それは あの 昔は × 麦飯だよねえ。

(33) 当時、「蘭学をやるなら宇和島に行け」と言われたほどでした。当時の日本はおもしろい国 {ですね/デシタネ}。

(司馬遼太郎「司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録Ⅳ」)

ちなみに、次のようにダッタ使用の実例はたくさんみられ、こちらが基本用法である。

(34) 昨秋のベルリン公演は、トルコ人街のど真ん中にある劇場 {でした/デス}。(朝日新聞 2002/1/6)

次に「②客観時トキ名詞」をみていく。「②客観時トキ名詞」—「昭和二十二年、1945 年」などは客観的な時間位置を有しているトキ名詞である。これらは発話時をどこに設定するかによって、過去の語にも現在あるいは未来の語にもなり得る。「明日、昨日」などの語が特定の時間性を焼き付けられていることとは性格が異なる¹⁷。

(35) 七〇年代に原宿セントラルアパートにあつまっていたグループの、六〇年代版みたいなものがあつたんですね。才能のある人たちが、なんとなく集まって伸びていく感じ……。/マキノ ジャズっぽいものでセンスのある人たちが集まっていた時代 {です/デシタ}。(週刊朝日 1997/12/12)

(36) 湾岸戦争は 1991 年でした。平成 3 年 {です/デシタ}。平成 7 年は…あの「阪神大震災」と「地下鉄サリン事件」の年 {でもあります/デモアリマシタ}。

(<http://www.nakasu.co.jp/fukuoka/log/115.html> 04/02/10)

次に、「③客観時人名詞、客観時出来事名詞など」をみていく。以下の名詞は時間表現の上で、「②客観時トキ名詞」と同様の振る舞いをする。

まず、「③客観時人名詞」からみていく。次は、発話者の司馬遼太郎からみれば、「安藤昌益」「勤皇の志士」などの人物は過去に位置する。従って「XハY」の時間的内容が過去に保証される。

(37) そのなかに有名な安藤昌益がいます。大館に生まれ、八戸で暮らした人 {です/デシタ}。江戸期の、つまり封建体制のなかにあつて、根源的な思想を展開した人 {ですね/デシタネ}。

(司馬遼太郎「司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録Ⅳ」)

(38) 「春雨じゃ、濡れてゆこう」という有名なせりふを吐く、そういう勤皇の

志士が長らくヒーロー {でした/デス}。

(司馬遼太郎「司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録Ⅳ」)

次に、「③客観時出来事名詞など」を取り上げる。歴史的に有名な制度や出来事なども時間性を有する¹⁸。そもそも、客観時トキ名詞の「1945年」もキリスト生誕から数えての数字である。「戦前の日本語教育」といえば、自ずと客観的時間位置に置かれる。

(39) 東京オリンピックは昭和 39 年の出来事 {だ/ダッタ}。

(40) 明治維新成立早々に大村益次郎がつくった、そして徴兵令によってつくった日本陸軍は、あくまで国内向けの、つまり明治政府を守るというだけの軍隊 {です/デシタ}。(週刊朝日 1997/12/12)

(41) 遣唐使の時代は、中華帝国とその臣属国、朝貢国が織りなす東アジアの国際秩序の中に、日本がどうやって入っていくかという時代 {だった/ダ}。

(朝日新聞 2001/12/23)

ここでは、歴史的に有名な人や出来事がいつの人の、いつの出来事かという知識の有無が鍵となる。「XハY」の内容が一般に周知されていない場合、聞き手は時制形式によって「XハY」の時間位置を知るしか手段がない。名詞の語彙的知識や言語外事実に対する知識がない場合、ダッタが承接した名詞文は基本的な過去とし解釈されない。

日本語には出来事名詞や人名詞、あるいは制度名詞などの時間をマークする形式はないが、マーカーがないから見えにくいだけで、歴史的に有名な名詞は時間軸上の位置をもっていると考えられる。過去を表すマーカーがない日本語では、「安藤昌益」や「東京オリンピック」の過去性は、語彙的知識に負うことになる。また、語彙的知識は、どの程度有名かという観点から、言語外事実と連続するだろう。宮島(1997)は名詞が有する時間性について言及し、現代人の私たちは「石器」を作ることはできても、「旧石器」を作ることは可能かと問いつけている。このような「名詞の時間性」について従来あまり指摘されなかったが、言語研究の上で存外重要だと思われる。

ちなみに、『言語学百科事典』(1992: 146)によると、ポトワトミ語(Potawatomi)では動詞で過去時制を表すのに用いられるのと同じマーカーが名詞にも用いられるとのことで、言語によっては名詞に時制がある可能性を指摘している。以下に引用する。(波線: 筆者)

ある言語では、動詞以外の語類でも時間的関係を表す形態的なしるしが付けられる。日本語では、形容詞にこのようなしるしが付けられる（例：白い、白かった、など）。ポトワトミ語は、動詞で過去時制を表すのに用いられるのと同じ語尾が名詞にも用いられる。

/ nkəšatəs /	I am happy
/ nkəšatsəpən /	I was once happy
/ nos' /	my father
/ nosp' ən /	my dead father
/ nčiman/	my canoe
/ nčimanpən /	my former canoe

(C.F.Hockett, 1958, p. 238¹⁹より)

また、Comrie (1985) も、Nootka 語では“the entity that was an X”と“the entity that is an X”は区別され、時制を名詞句で表すと指摘している。Comrie (1985 : 13) より引用する（波線：筆者）。

In Nootka, tense can be shown on noun phrases, thus distinguishing ‘the entity that was an X’ from ‘the entity that is an X’ ,as in *inikw-ihl-’minih-’is-it-’i* ‘fire in : house plural diminutive past nominal’ ,i.e. ‘the former small fires in the house’ .

名詞の文法は、田窪（1998 : 35）によると、「いまだ、体系的なものが存在しない」といった状況であるが、他言語における名詞の時制についての記述が日本語に適用できるかどうか、今後の課題である。

以上、「時制形式の交替現象」の条件について述べた。

6 まとめ

本稿の目的は、「XハY」の時間的内容という観点を設定した上で、時制形式の交替という言語現象とは何かを明らかにし、交替現象を引き起こす条件を明らかにすることであった。「時制形式の交替現象」が示唆するのは、「XハY」の時間的内容と時制との間には相関関係があり、「XハY」の時間的内容がダの時制的機能を決定するということである。以下にまとめる。

1) 通常、「XハY」には時間概念は内在しない。時間概念が内在しない「XハY」では時制形式の交替は起きない。

2) 「XハY」には時間概念が内在する場合、基本的な「XハYダッタ」では、「XハY」の時間的内容も過去、時制もダッタである。「XハY」の時間的内容と時制は呼応・一致する。

(42) 昨日は月曜日だった。 (基本的な過去)

3) 「時制形式の交替現象 (のダの文)」では、「XハY」の時間的内容と、時制は呼応・一致しない。「XハY」の時間的内容が過去に保証されると、ダは現在 (および未来) に位置付ける機能を失う。

(43) 昨日は月曜日だ。 (脱時制: 時間性不問)

4) 時制形式の交替現象を引き起こす要件は、「XハY」の時間的内容が過去であること、「XハY」が変化することなくずっと成立すること、の二点である。

5) 「XハY」の時間的内容が過去であることを保証する言語的な要因には、分裂文のX項の過去形や過去性を有する名詞 (トキ・人・出来事名詞など) がある。

6) 「XハY」の時間的内容が過去であっても、文末時制形式にダッタは義務的に要求されない。時制形式は「XハY」の時間的内容に従属しないことが許される。

最後に、本稿では交替が起きるかどうかを文レベルに求めたが、今後談話の中で検討しなければならないと考えられる²⁰。

1 本稿は田村『現代日本語における名詞文の時間表現についての研究』(2005年度兵庫教育大学大学院教育学研究科提出の学位論文)の第5章に相当する。

2 ちなみに、英語母語話者の数人に聞いたところ、英語では“*Yesterday is…”とはいえないそうである。

3 「想起」は寺村(1971)の語である。

4 文の時間は、時間軸への位置付けということから直示という概念抜きには語れないと考えられる。Comrie (1985: 13) は「Tense and deixis」の項目で次のように述べている。

A system which relates entities to a reference point is termed a deictic

system, and we can therefore say that tense is deictic.

5 砂川（1996）は「首相は橋本龍太郎だ」という一見単純な文が実際の使用の中ではさまざまな意味に解釈されることを指摘している。

6 次の例文では修飾部によって時間性が異なる。

・くじらは { a 最も大きい / b 絶滅しかかっている / c 捕獲禁止の } 哺乳動物だ。

7 工藤（1998）は非動詞の述語全部を対象とした論考である。

8 名詞文の構造をどう捉えるかについて、工藤（1998）と筆者に違いはあるものの、両者は相反する考え方ではなく、最終的には同じ結論に達すると考える。例えば、「彼はすぐれた文学者だった。しかし、今はただの物書きだ」の例文では「特性の過ぎ去り」のようにみえても、「すぐれた文学者」という属性は現在の彼の属性ではなく、過去の彼の属性である。その証左として「*現在の彼はすぐれた文学者だった」が奇妙になるのに対して、「過去の彼はすぐれた文学者だった」は適格文となる。

9 「なりたつ時間が限定されていないもの」について、高橋（1985）は、「地球は太陽のまわりをまわる」などの文を挙げ、「なりたつ時間を限定」しない、あるいは「なりたつ時間的位置に関係のない」などの説明を加えている。

10 話し言葉と書き言葉において、時間構造（および人称構造）に違いをみせることは、工藤（1995）に詳しい考察がある。田村（2004）によると、名詞文でも、次のような文は書き言葉（小説地の文）には見出すことができるが、話し言葉で許容されないと指摘している。

・最近葛山を喜ばせているのは、一流新聞社の主催で彼の個展を催そうという計画であつた。（松本清張「赤い白描」）

・紅葉を門松のように、宿の番頭達が門口へ飾りつけていた。観楓客の歓迎である。／生意気な口調で指図しているのは、渡り鳥でさと自ら嘲るように言う臨時雇いの番頭だつた。（川端康成「雪国」）

11 時制は、従来、述語の形態的な文法カテゴリーであつた。ムードの研究は、既に述語レベルから文全体を対象としたモダリティ研究となつて久しいが、時制研究も文全体の時間を研究対象としたテンポラリティ研究でなければならないと考えられる。

12 このことは、「想起」に関しても同様のことが指摘できる。典型的な「想起」では、「XハY」の時間的内容が現在、あるいは未来であるのに、時制はダツタで

ある。

¹³ これは (10) b が不適格になることと同じ事情である。

¹⁴ トキ名詞には、もうひとつ「他の出来事基準トキ名詞（前日、その日、翌日など）」がある。これらの語は、「1989 年から平成の世になった。その年が平成元年 {だ／ダッタ}。」といえは時制形式の交替現象が起きるが、これらの語は他の出来事が基準になっているので、それ自体に時間性は認められない。

¹⁵ 名詞の時間性（およびアスペクト性）については宮島（1997）、田村（2004）を参照されたい。

¹⁶ このタイプが許容されるかどうか、個人差が出る。

¹⁷ 田村（2004）ではこの点を明確にできなかったが、宮島達夫先生からの私信による指摘で、本稿のように修正した。

¹⁸ Comrie (1985 : 14) に次の指摘がある。

One possibility for a reference point is therefore a ‘famous event’ .

¹⁹ Hockett (1958 : 238) の記述は以下のとおりである。両者は使用している語が少し違っているがそのまま引用する。

An allocational inflection of nouns is sometimes intersected by a n inflectional category reminiscent of tense or aspect : Potawatomī / nkəšatəs / ‘I am happy’ (verb) and / nos’ / ‘my father,’ / nčiman/ ‘my canoe’ (nouns) versus / nkəšatsəpən / ‘I was formerly happy (but not now),’ / nospən / ‘my deceased father,’ / nčimanpən / ‘my former canoe, now lost, destroyed, or stolen.’

²⁰ 収集した実例をみていると、ダッタからダへ交替できそうな文は多いが、ダからダッタへの交替はそれ程多くない。名詞文では形態的にも（時制形式の承接が義務的でない）、意味的にも（ダの現在性はゆるやかである）時間を不問にし易いのに対して、ダッタは積極的に過去に位置付けるからだろう。

参考文献

- 工藤真由美 1998 「非動詞的述語のテンス」『国文学解釈と鑑賞』63 巻 1 号, pp. 66-81, 至文堂.
- 砂川有里子 1996 「日本語コピュラ文の類型と機能—記述文と同定文—」『言語探求の領域—小泉保博士古希記念論文集』pp. 261-273, 大学書林.
- 高橋太郎 1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス (国立国語研究所報告 82)』秀英出版.
- 田窪行則 1998 「文法 (理論・現代)」『国語學』193 集, pp. 31-38, 国語学会.
- 田村澄香 2000 「名詞文のテンスの意味の考察」『日本語教育』106 号, pp. 17-26, 日本語教育学会.
- 田村澄香 2004 「名詞文過去形の「XハY」の時間性—「想起」をめぐる—」『教育実践学論集』第 5 号, pp. 23-32, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科.
- 田村澄香 2005 「特定の時間位置に位置付けられない名詞文」『語文と教育』第 19 号, pp. 左 (33) - (42), 鳴門教育大学国語教育学会.
- デイヴィッド・クリスタル著, 風間喜代三他監訳 1992 『言語学百科事典』, 大修館書店.
- 寺村秀夫 1971 「‘タ’の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置付け—」.(1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版に再録)
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 仁田義雄 1997 「1 文法とは何か」『5 文法 (岩波講座言語の科学)』pp., 岩波書店.
- 三上 章 1953 『現代語法序説』刀江書院. (1972 くろしお出版より復刊)
- 宮島達夫 1997 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』pp. 157-171, ひつじ書房.
- Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hockett, Charles F. 1958. "27. Grammatical Categories" *A Course in modern linguistics*. New York: The Macmillan Company.